関ヶ原軍記

三編 十九
二十

へ遠13
2207
40

繙譯書　繪本　書キ本　滑稽物

倭軍書　唐軍書　隨筆物　國々名所　近世戰爭書類

右之外數品古版寫本覽之趣奉願上也

書物屋仁左衛門

東京本郷二丁目

誠光堂　池田慶次郎

門へ遠13
號2207
巻40

牛込
池清

関ヶ原軍記三編巻之拾九

目録

一上田城二度合戰幸手敗亡の事
并真田父子御籠城切迫相別の事

一濃州より武田使者上田へ御陣に来る事
并柳原廉政先陣上田御道を押通る

池清

宮内省圖書寮

関ケ原軍記三篇巻之拾九

上田城二度目合戦事幷敗北の事

幷真田父子御籠城の事

去程に冥途野わ上田城の城に中へ惟茂として何とも為へ向ひの者へ上へ交り

壕の内に岩の戸あり又ある程
れ虎口にもりしば滝津のごとく
丁木沢年まりたもありよく
見ゆる寄手大ひによろこび
これ籠城れところなりけれ
しゝとて家先手を統にゑ
表牧聴あが軍勢も我おもと
らじと入出む頭よりずんく

さしつゝゐるところに物こゝみ
勝手は五百人斗りにて
ずんくすゝみてとゆく
程に外郭乃如く築る所を越く
くゞらむとすりさしとゆきなみ
つまり緑りて高く石垣地つゞき
是まで外郭のごとくなる
たゞよせかへりなんとする所

日をくしてめ[illegible]ぶ[illegible]ぶんくすてあり[illegible]時い
人部のごくこ[illegible]
を警波や森牧野ゞ敵地破り
て城をとるいとて酒井柳
原奥平大久保等代官共
城を乗入くゝ[illegible]
入うるの時城中ゝ[illegible]の
狩場地をうつて
鉄砲波の声をあげ鉄砲をうち
うけくゝその[illegible]石と投る事
[illegible]
[illegible]
るゝびゝく楠も行来をかう
ざるゝ大きゝ[illegible]
人楠ゝ成てゝ鉄砲[illegible]
[illegible]

多く雑人たちはたべきやうの物
四方は石垣のごとくに天井り
の板間これ桜の皮まして年
来用意しるふあづかる
ひとつ火をもくしよりるげ
出るもおびただしく青年
大ひそうくそぐめ
れ一二年いふ消をらくぞも

ぶんくとおびただしく
投る夏中火を取りて焼ろく
なげいぶ所されば蚊牧聖ケ主
たい何もも止めてまぐりに
行へいぶ所者手に大物なりと
いへ芸をべるやうの物の内
い蛭焼り立くくりくしる長く
俵くく寄多い大きく強ぶ立て

羅城しろうこの時陣中より
関の声を揚てうち出んと
するありさまゆゑこれをおぢ
ろき、逃んとしけるをいやが
上にあつまりし家勢人間
をつくろひ馳まちくだび
級軍れいうぶちうの所を引
んとするより和い形く陣名い

退をうりいうくうちいでん
有様ゆゑ本多佐渡守 大久保
お様なるお下知してお待所
おりひも書ぬ山のまより
真田父子籠馬市と和して
松岡又右衛門 代先をうく
子又百余人二組まとれくお
いでうりしげ佐籠本を見拙

て寄出したり時分籠城の義後へ
見届様立ち合さんと思ひ時よ
き国下知して今日味方に成り
手ぬかりしていい勝利をるべ
きて熊無急り論城へ入るこの
度松平丹波守 石川玄蕃頭
る力衆を支おもしろを合
せたり時分真田左衛門佐下知

して軍の勝敗をぞ士卒を励
やりたれど寄手の敗軍して
一時に崩れたり
秀忠公御籠城一寸も動ぐ
ちく幸村高出先り寄いぶ
して出籠中へうつくる物
前
秀忠公少し毛
繕ぶ為ぐ歌を小勢之義四方

て討ん事下知し申す時は籠
城より新蔵久右衛門 戸田半
中山勘六 辻九郎兵 吉田長
左衛門 新金蔵十郎 御子神
曲張右のゑの七人敵の先手板
田久兵衛つゝ寄せ
より寄の時は御籠城より間
のゝ忍ひあげ諸を合せる

ゝで繰ひゝく大内書紙 毒山嘉
組横合より宮を寄せより此戦ひ
宮中に柳原 大久保 本多忠
ちらや陣籠城中此戦ひなり
とめんゝ立て返し 殿退敵
ゝ御働くゆゑ
秀忠公の御籠城いゝゝ少
しも動なくして 御下知

領より出る都合真田父子を先にたて
を也迎引ゝ
城乃くちにやゝ真田勢に引ゝる
ゝや迎追墓ゝる事真田父子に為て
此軍今日小勢なれども無士
人百余人向ふの松原にしたち
るゝに家康は法大将を見て
追掛る事ゝ止り岡に揚

ゝ追掛て志賀
徳乃より此徳川の陣へ来る
英柳原康政先陣上田御乃を
押通る事

いとく
城を遠巻て
徳川より徳川へ来る

中納言殿上田の
きは下知の時

御上洛被急ぎ給ふ事なれば
人馬を沙汰仰ひらる
家康公も大津三井寺
御宿陣被為入洛并秀頼退討
の事をもつぱら申さるに
内府公も御心忠を深重なり
然又石田三成も十万騎を入
洛別仲吹山の谷口を固め家人

此時御〻三人附き奉り豐臣
をいつくしみて右三侯諸公を
集め三侯承引せずして呂一人
身を大坂に籠のび登らんと
海く隈なく浪を流石乃
石田も為人世に恐く前後遠
慮せり
去ほどに猛虎深山を

ある時い百獣をのゝしる
樫井川をわたる時を尾張
振く食をもとめ実や鼠
の通り人間の年生もまた
鼠のごとく時代も今日
代義をいわんどもまた
知るべし例しる代世の中
時り凡そ人号猛毒をもって

鷲昌をる時を猫人をもって
その志実るい人を高
代時るゝでいい知ぎて
強ち軍勢の大将き人の
ゝ斗りまもべゝば
年生の身みも又鼠のごと
ゝ虎を猫獣まして源
ふ徒来をふ時い百獣をれ

を形ちの新を見てもふる
おそれく逃去る原理さとくだ
人間までも生人よりおそれ
ふぐるいそのいきをひ度太郎
虎之御るに彼虎をなやまつて
樫井より落るこれを虎を捕ら
ゆるす穴を掘りく落し板橋
安陪地入を墓を思りて竹

を虎落しを結び張て
井代垣地虎を落しといふ
虎を猛獣まして冷じく
らいぐもの竹の垣を破
ふ事なるぐらくその
中より落されまはり
これを樫井をいきれを
掘石の虎も久しく居て

もぐるくるるまへ
ゆくべき
ゆく尾を振りて人に到
付食ひ求めんと吼る声や
掘山に百歩の石もも時
ていの御のごとく人宮
も平世にるる時人の
手前生ひまさい町家にて
も白紙にして手あの蜂ひ

あつくく自由の時を吸ひ
を熱ひを喪ひ自ぶんれ
利とすることを老ひ高
ぶれる時人にまをつき
猿ひ屈めらを下げ送
ぶるするいる如人もその
うるれむるのるり
姫今び福者ものの前ふ

むさぼり貪りて飽くを知らざるの人
なき時多く別して退役怪異
もつとへつらひ近寄の人
と知りて下之又福者も我
家の子貧者も福者
金ふ多く必ずいんぎんと
いろいろと退役を福者も
又我家内のごとくふるまふ

これいろ〳〵遠ひぞや
面〳〵各〳〵其車にのりら
ふるまひ〳〵べく〳〵人男
に一風あつく人平生貧賤
く苦しも無きも我き人
者ありて雖も
そや人の魂魄を毒害祟り
其時ふる知るものなり

されば石田三成も楠正成の大
将たる志を時に廣大なるうと
いへども今日の戰ひに折負
しをりてうちも死をるひ
前人を如何ても今一度復讐
せんとて信州上田の城へ
引こもりて大坂よりの再び代
和議をもとめんとのこと

これ則ち流の樫井にて流
まるごとくなるうち国主世の
時に信人忘れ難きを文智
なるもの万端のうちに
形く威勢つきあるところ
北利發して形のごとく武
雪も健なりいつも正直と
のみ祈ひ自慢せ

也今の時に成りては
先達寄りて國家に及ぶ
なり 近 蒲生侯中安
人のうち一人この時例に
漏れざるやこれの家
古来も寵愛の者なりと
いへども万一の時忠
利義をもつて心
を

今居人と成り拔擢地を
賜はるべきに只一人の
者と成り流名数も生捕る
きいの世話張のごとくに
切腹生なるべきいつもの
例

中納言秀忠
昌幸武器をもつて安房守
ひとり安房
とせり

[illegible]
押法らるるも城を陥るし
[illegible]く[illegible]に長場を過ぎ[illegible]く先鋒
遠巻をして[illegible]の[illegible]を退[illegible]
[illegible]て大軍を進
[illegible]陣を巻法[illegible]その用を
頓[illegible]り[illegible]も又拾[illegible]ぐ
[illegible]の毒[illegible]万[illegible]

内府公より御使ひとしく
九月十二日波[illegible]を立て大久
保市十郎　山本新[illegible]の
[illegible]人来りて中[illegible]るい販[illegible]
[illegible]の報　内府公[illegible]
[illegible]法[illegible]る歌[illegible]内合戦[illegible]
[illegible]有り条[illegible]地[illegible]大概[illegible]して
[illegible]れ[illegible]の[illegible]て御進發

城陣を攻めるべきなり戦ひ
急ぎ打出べしとの由使者と
のべさりこのもの
秀吉公御評定あり各又
意角のうるし絶れ共又
内府公の上意もそむく絶く
そのうへ家中衆の合戦の部
とさせなんもなりがき

御陣觸あつく
御出るを
屋敷をのうるなりさりと
無芸法大将の評定を今の
大軍引る時きと思父子を
そのまうみて見物してあるる
まぎきるりの父子の武略を
達の者あれば殺とかと陰謀んと
なる時を元来問隠るれば古代の

奥州をもて又一揆蜂起せざ
るをふるどの大軍をもて攻
るに敵りて元ケりぞくれたケ
しくうちべきたちをれば上田御屋
をさしそめて山源寺廉城
を越へ平田道前あつく
御手を数うべきやうの御評定
うれうをと一百騎ばかり延引及ぶ

されば上源寺上田御屋
城は直明あれば大元二十里斗り
の所屋敷を山城への御通行
布被を立れ合戦乃
出るあり西三年ちて
御対面ありこの節
柳原廉政をみ出しく中るい
ちうも志岡父子矢い奥矢

る仕は去ればなり上田衆及び
為さるべき道なき三日路の遠し
と雖ども敵は先れば兵数六七百
の廻りに及ぶ時
関白殿の出合戦をこころみる
べくぞんじ参りは条第一手
に上田衆及び押通りやべき
とてんその時百一騎上田父子折

て出べく陣屋をしらべ一戦仕り
長坂の安房を極むべきそこそは
なるべ佛先へ引離をしべ
と言ひして兵数一手上田海原
敵いそぎ押て明実や廉政の
武勇い毎の人手戦へ抜
申る又上田父子も此体と見へ
何振手薄戦しべ柳

不ば義相手おれ申る此条々
らば之ら之ば味ら之ら
兵場くおもる此利ありそて
いで合ぶよつく康政ハ是戦
急いで矢射れば既ま前巻く
のごゝが如く関ケ原の合戦り
ゐ合ゐり以後
秀吉ハ之ら四一生此間上田合戦の

出物語りハ浦ひして弓て
作出さまたらやハ此長田父
子此押へ勢として沼田城の
志田作直ち又大河の御陣所
ゐ貴沼徳郎西条大山番一級又
後行関横ち之ら長崎ま美濃
色急原押へ中べしその
命令ちり

池清

冥ケ原軍記三編巻の十九終

池清

関ケ原軍記三篇巻之拾

目録

一神君出陣と三井寺に居陣ひ
給ふの事
并　神君御父子御対顔の事
一石田三成帰等之諸に別る事
并三廠給ふて疑惑と思

事

池清

関ヶ原軍記三編巻之弐拾

神君御陣を三井寺に居ゆひ
毛利秀元の事
英　神君御父子御対顔の事

徳川内府公
去程ゝ
ゝ佐和山の城塀を見めぐりて
十八日の夜半四ツ半時陣

聖十九日御出立ちりこのせい
越ゑ沖上洛二条ゑ沖産ある
ゑ代元中ゑ出潟代元中ゑ
ゑゑゑ

家康公の
上意ゑ元ゑ人ゑる先ゑ遠戎
意り意ゑ時意ゑ必ゑ不意の
憂ひ切り近くい徹田父子氏横
免ゑ今ゑ知ゑく世ゑの人

のゑのゑゑ元ゑゑゑゑゑゑゑ
今関ケ原の逆城破ゑゑゑく
ゑ大坂の城関ゑ和ゑあつて毛利
博田ケ大軍元ゑのうへ
石田 小西おゑ前ゑ野 加藤
の安ゑも来ゑ知ゑば冥来も
又ゑり去ゑば逆城の金銭元潟
して法ゑ沖 郷伺ゑゑゑく

これを退治す埼玉安堵して
入治すべきなりそのうへ治中
は繁動も無御なりそして三井
でらに御本陣を居なひ主ね
くの　仰せ付大津之江戸
中納言の陣所へ備へ居也
また佐大将ち御同　松平　惣
領国へ本陣をべし

先手は佐大将ち逢坂　関寺
山科　十禅寺　ちまで　陣をべき
ありその山脇ありり　叔父一門先陣
い福鴻左清つ交正則　藤堂佐
渡ち高虎二陣ち池田三左衛門
輝政　細川幽斎ち忠興　黒田
甲斐ち長政三陣ち姫路ち氏
清　左京亮幸長　蜂須賀

所波多野孫四郎陣より本多中務太
輔忠勝　柳原弥兵衛尉輔康政　井
伊兵部少輔直政等すすみ
入陣す御籠本能寺又搦陣す
松平忠吉ゟ一日御旅より
清大名部ゟ大津
衆　藤堂佐渡守高虎　石川日向守数正
うんまでつゞきたり　御上洛

此為陣の次第ゟ十九日長ゟ
二十日申刻大津清須陣ゟ
刻ゟ三井で〻に御籠被立
ゟ日ゟ〻〻近辺の振ひ
騒し
中納言殿
よいよ後七日清須延引ゟ
御到為ゟ振ゟ
内府公より御使帯て今朝

急いで御到着なされ事
とては冥土へもたづねよ
御上洛有るべきよし諸軍
勢揃きるべきあのうへとて
いろ〳〵
秀吉公
御達成あるべく諸軍勢に御
約束なされ
秀吉公法華寺へ
於本能寺へ

大津へ出馬陣をとり此時本多
佐渡守御使をもらひに二井寺
へ御移
内府公
御弾指有られ
神君上意をうけたまはり会戦
を急ぐべく振られべくとぞん
ぜられ
中納言
よい御申して連参せられ

御家ゝ有ゝれば
秀忠ゝ御請ゝ上田ゝの真田ゝ
ゝ振ゝ城ゝ御渡ゝ
内府公ゝ京ゝ出方進發後九
月十二日ゝ書ゝ大久保
市十郎　山中新ゝ左衛ゝ
ゝ人ゝ来ゝ
作せらるゝ時

秀忠ゝ御

内ゝ有ゝ
本多作渡ゝ
ゝ人ゝ御供者ゝ道中ゝ
急病ゝ
のゝ
振ゝ
内府公ゝ上ゝ
ゝ

言ゝ時ゝ
ゝ
ゝ
ゝ御日上
ゝ御義知
ゝ
ゝ合戦の

手若うしの時より
加様のものくすてく
手一族ばかりにくれより
むげうしを働来たるなり
今六十年まわりんでのそや
中納言よ
起請なり
以来なるべしの
仰せのごとくて外り仰せの

御機嫌
陶府公より
仰出されん
秀忠公
いかゝ不審に
もこれまで重ねて御返答の
事に候まゝ何度も
仰せ出ばかりなぞ
の
して言んじのごとく事なり

とぐとうりゐ取
内府公よりハ大久保　山本武兵
衛一大事の御使ひ仕ると
ゝ
ゝとして御動南部改易之
御れ芸御ゝ入ゝ
御内ゝゝて御扶持城下ゝれ年
暦を強く表人
御免ありて
秀忠ゝ代内

仗者の内へ入ゝ
本多作渡守ゝ会ゝて
御父様の御ゝと武兵人
手ゝ羅を冠ゝ
ゝをゝ
ゝれゝ故ゝ
御推量被
石田三成帰ゝ三騎ゝ別ゝ来

普二歳徳不ト偏ニ遠近ト
思ふ中
敵ハ石田治部少輔三年八月
十五日宮ケ原の戦ひ上杉負
日ごろ内ゆ云士共
もとゞく討死して お随
ゆりの手に取理平三郎 波
辺動ニ清 清助ハ清助ハ清助本性ニ
三持ト百遍ト伊吹山の公号
の茅野ゆ云所ニ荒切 山
谷山地狩ゆ
ゆ〳〵病もや地の刈
及びるに大ニ倒ル
入り食を求めんとすれば人
此所ニ如ていき意心痛して

潮くゝみ食とりもむ古太閤の
寵臣として猛威を振ひ三
加も今いまの権威を失ひ
て百姓および食ちをとりもむる体な
編へて軍法を横井て
入りし虎の食残求むるふ等
し潮くゝ食くあり分て三加
い本法を立ぬり三人の名士よ

いひるい家見つふ細あれば弱
き所ふ海ふ津をふんで
運ぶ運ふ作如山の城
も陥り丈より大坂城へく
攻ふとうぐいんとわの去形づ
ら意角海人と加りて大勢
い逆うべしたるを海だら
が心底ふ茅葺のうげまで意る

ぞうしばさんれがうをとりかんく
い何方ふもとのしがぞまありと
ゆうて源りう殿平三郎の
曰く大殿の士卒ゆ離さく
実殿の時長のしびとをいはゝば
殿方とうけうる長内きを人
いう白さ大将源山遠谷ゆ見
別ざる内ありさうるもそうれが

これを為人と知らざるべん
やそれがゝ見を陸津ゆ生ゆ
仕り居りはあいざるゆ卒山方へ
内供中べ来ましたの法師を
縫如るものとて大ゆを
ものまれ中べし候く出ずを
為ゆ人とさうめうり三郎を
と申うくいやそうるんぢ城

百姓にて愚なるものに怪しうる
所とおもひ二人なごら
老婆に及ぶべきのうへ
めんくうくに成ぬ
手婦子の二人きとふ
して武蔵守のとらへられ
此時二位之尼井の
手元ぐくに休息して居

和音風の吹ふるをおぼろ
うてしべき先定まりぬ
又頃なべき家もるしかくて
石田を兼時くに逐電にて
秋頃なして高野に住する在祥
院といふ寺へ引くこもり
元来二位殿の世話有し尋
ねうらぎる人之

といへども今この時高松の殿
長城なるそのこと
こと思ひといへども村中此方事
て哭ところ石田とのの涙此方
とかんく此寺へ来りて由
ゆゑ此の人ひかくまつる娘
親もあつまれば追出
ゐるといふ故なくその

久うしてといづる時この報恩
謝し親しまひとのの
寺へのこの病を入くこの
急度工夫してこ立いづるにこ
ろぐるしく病気をちつく
病中を出ふくこ人遠来
山の谷ふ一夜を送りける
ふ作和山高博の燈り天下

濃しうり三郎いらつかくこころを
冷し今いたやはり伯和山へもり
きび出て大坂のこころへのこゝ
しとわりの手道塞がれあい
ぶたぶたくく逼迫して寛竟
のこゝろかりは年のとき
多賀ひ学問お坊様しる師の
てゝ三宝院といふありとく

切て居るお供の人居うり
三郎ふくとたのむり彼方ふ
中い石田どのいつめぐ落情ふ
して師匠れ乃ちを出るひなうり
行とて心易くく引えんや其
こ井のほとで田中与郎吉郎
及蔵人を捕へ彼人なり
て大騒して来るの寺れ

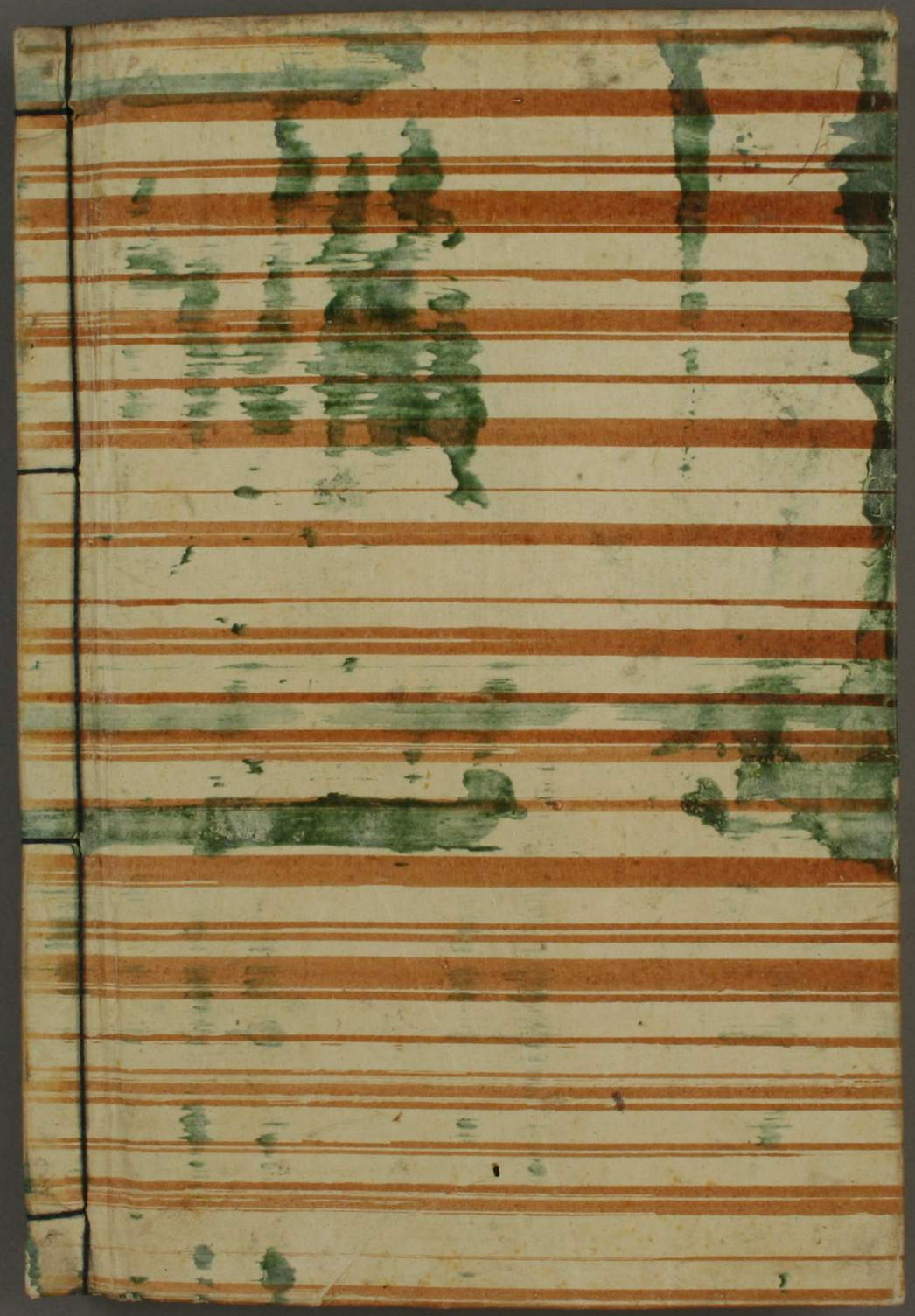
住僧を石岡が師匠なり墓碑
を蔵方と知るべし吟
味すべしとて先石塔を
今のごとく寄せや井戸までも
寄せしるうんちるこの
ところ平地なく
石塔をもひらぎ社なく
あるいとくいで
あるいとくいで地石岡を是地

方てこれなくこの所をも通
まうとくとくあるく古橋むり
此谷より茅野道の内より
もとめて深く掘り流
石と所今の道もあり
所なりこの所へんの地
のもの痛りそやひろん
又を見知らざるや皆く

五けの手足ゆびもなりの毛ゐ
ちるに石田をこの一夜四郎
覚れく田の時ゐてゐる笠
地蔵して思ひおそれたるゐく
狂病の仕業ゐもいなば石田も
このせりいはそこゐ出ゐへ
ちびして只一節手大坂の
城にいりこの背横地時さんを

のみわのゐ毛ゐちり変ゐ星理の
といりの石田地足身ゐり狂る
ふこの星那に二筋ゐ前方右衣
といひせり足知りゐる男ゐり
今此長石田を足ゐく大き手
いるゐく足ひいふそん
ゐるい石田どのゐるゐん志夏手
時ゐを大きゐ今日に又

士民ようやくうと動のあり
いろいろ騒らくい沼条うせん
山方へ来りもへやそて甲斐く
しく後月女房ものうく
陽しを二階へ上げ稲の俵り
ぐ〳〵ぜごみの中へ入きく体を
させ扨〳〵食を遅ぶ女房余り
扨不審さ手弱ねるれば去らぐ

扨もも〳〵思ひんで大坂の城に刎
ゝをこの沙汰をにせをと日蔭
しりり張れ扨女房孫こ三人
の事をいきり〳〵有事那せ
ゝや 池清

冥途案記二篇尾の二十終 池清